

DALS ニュースレター No.11

東京大学

21世紀COEプログラム

生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築

Construction of Death and Life Studies concerning Culture and Value of Life

2005年10月1日

目次

仕分けの箱

高橋 都

書評 ジュリア・クリステヴァ著『斬首の光景』(星埜守之・塚本昌則訳)

福島 勲

研究会・シンポジウム報告

死生学研究会「現代日本の葬送儀礼のゆくえ」報告

島園 進

Julian Savulescu 教授講演研究会報告

一ノ瀬 正樹

今後の予定

ジョン・ノース教授(UCL)2005年度 死生学連続講義

市川 裕

国際シンポジウム

「死の向う側 進んで死を迎えること、死者とともに生きること」

多田 一臣

「次世代死生学研究会議～深化と展開～」

仁平 典宏

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku>

仕分けの箱

高橋 都（医学系研究科助手・医学）

「人を知識で整理してほしくないんですね。」

10年前、乳がん治療を受けている女性にインタビューをしたとき、聞いた言葉である。当時私は大学院に進学したばかりだった。内科医として10年間働いたあと、どうしても医療という場での個人の心理や、社会・文化的側面が医療におよぼす影響について学んでみたくなったのだ。学生に戻り、まずは病院時代からずっと気になっていたこと、すなわち、同病者同士の交流が患者の心身に与える力について、聞きとり調査を始めていた。そして、診察室とはまったく異なる状況と立場で、当事者と向き合っていた。

手術から5年たったというその女性は、“専門家による心のケア”について言った。「カウンセリングはプロのお仕事ですから、人間的にいい方であれば、専門職の方がいいと思いますよ。・・・でも、専門職の方は、相手の困りごとが重ければ重いほど、知識を使って対応してくる場合が、往々にしてあると思うんです。・・・同じ病気になったからといっても、本当に一人ひとり違いますよね。一人ひとりに違う受け皿をつくるのはできっこないですけど、でも、この人はこの箱かな、あの人はそっちの箱ね、と安直に分けないでほしい。分けるとしても後日のことで、相対して悩み事を打ち明けている相手がいる間は、その人に向き合ってください。」

数年前、彼女の言葉を思い出す本に出会った。アーサー・W・フランク著「傷ついた物語の語り手 身体・病・倫理」(みすず書房)である。フランクは、病いが語られるとき、医療者も含めた社会一般の人々は「回復の語り」を期待する、と書いている。その基本的筋書きは「昨日私は健康であった。今日私は病気である。しかし明日には再び健康になるだろう」というものであり、その背景には「すべての苦痛には対応する医薬品や治療がある」という期待が存在するのだと言う。しかし当然のことながら、そのような語りは、人が死を迎えつつあるときや慢性障害が残るときのように、治療や専門家の無力さが露呈する場面ではまったく役に立たない。「回復の語り」が役に立たないという事態は人々を不安にするため、状況を何とか介入可能と再定義して「回復の語り」を取り戻す試みがなされる、とフランクは言う。たとえば、混沌の中にいる患者の状態を「抑鬱」と医学的にラベルをつけ、(治療効果はともかく)臨床的処理が可能な症状と位置づける試みである。そうやって、患者の経験は医療者による臨床的介入で取り扱える形に切り取られ、介入の俎上にのらない部分は、医療者にとって存在しないも同じなのだ、と。

10年前のインタビューで聞いたことは、表現は違うが、フランクの指摘と驚くほど似ている。そして、医療専門家の思考パターンを看破していると思う。医療者は、人のこころについて考えるときさえ、その人自身と向き合う前に「この人は大うつ病、あの人は適応障害」と、専門的に用意された箱に相手を仕分けしていないだろうか。一旦ある箱に入りながらもおさまりが悪い人は、箱を転々とさせられるのではないだろうか。臨床的介入がどうにも不可能な人は、未決の箱(?)に入れられたまま医療者の視界から消えるのではないだろうか。あるいは、死を目前にしたときさえ、新たな仕分けの箱がつけられているのではないか。

大学を卒業して病院で働き始めたとき、最初に愕然としたのは、「何をしても避けられない死はあり、どんな治療でも対応しきれない症状がある」ということだった。今思えば、学部時代の授業は、症状(問題)と治療(解決法)とその理屈に終始し、治療法のない病気の記述は治療法がないだけに極めて短く、知らず知らずのうちに仕分けの箱の存在を自明視していたように思う。それを真に受けた自分の能天気さを呪いながらも、「すべての問いに答えがあるわけではない」であったとしても、正解はひとつではない」と心底思えるようになるまで、さらに数年を要してしまった。

今はそれがわかってよかったと思っている。と同時に、もっと早くわかりたかったと思う。

書評 ジュリア・クリステヴァ著『斬首の光景』(星埜守之・塚本昌則訳)

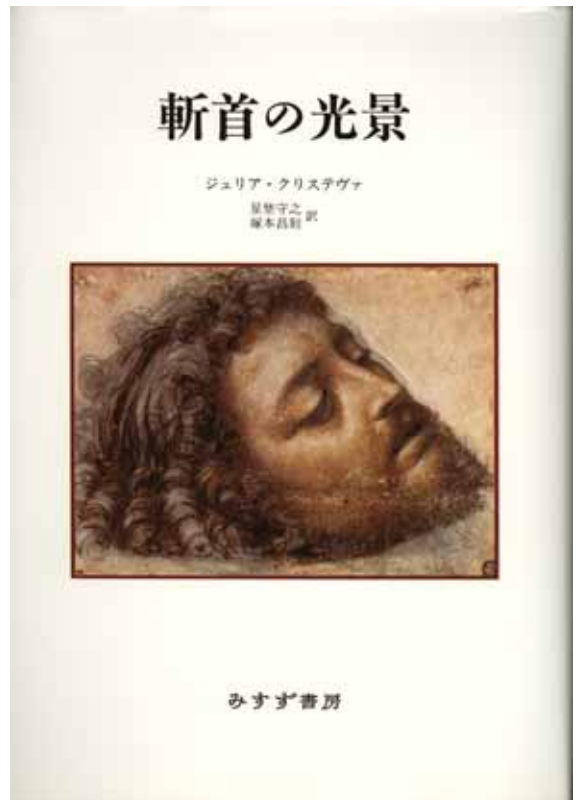
福島 勲(本 COE 特任研究員・フランス文学)

21世紀を生きる私たちにとって、斬首 頭部の切断 はもはや遠く離れた光景でしかない、と前置きすることからこの書評を始めることができれば良いのだが、残念ながら、現実はこの対象化を許してくれるほど簡単ではない。コソボやルワンダといった紛争地域から報告される虐殺において斬首は現実に利用された殺害方法であったし、またイラクで人質となった日本人の若者が同様の手段で「処刑」され、その一部始終を映した動画がネット上に流布するという信じ難い顛末を辿ったのも記憶に新しい。なるほど、斬首とは人間の歴史から消滅した過去の奇習などではなく、今もなお、こうしている間にも、世界のどこかで行われているかもしれない、現在時に属する事柄なのである。

だが、殺害という観点からすれば、むしろ手間とも思われるこの方法がいまだに追求される理由とは何だろうか。それは、斬首という行為が、単に犠牲者の生命を奪うといった目的には還元されない過剰さを帯びた行為だからである。実際、斬首が処刑という政治的スペクタクルの最も効果的な演目の一つを占めてきた理由はそこにある。ギロチンという近代的な首切り装置が発明された時、死刑囚に「せいぜい、首筋に涼しい風が吹く印象くらい」しか与えずに、その首を刎ねることができるかと喧伝されることで、死刑囚に対するアイロニカルな人道的配慮が強調される反面、そよ風のように人間の頭部を次々と斬り落として行く機械が人々の心に与えた恐怖感想像は難くない。恐怖政治(Terreur)とは、斬首の光景が孕むこうした過剰さを権力として利用する体制であったのであり、その派生語であるテロリズム(terrorism)もまた同様である。

こうした歴史的状況に照らして見た時、『斬首の光景』(原題の Visions capitales は「首の光景」、「重要な光景」と訳すこともできる)と題された本書は、そこに集められた図版の性格からして、奇妙な、居心地の悪さを誘発するものであるかもしれない。しかしながら、斬首の光景に取り憑かれた者が、必ずしも斬首そのものを肯定しているとは限らない。そればかりか、斬首の光景を見ている者が、必ずしも斬首の光景そのものを見ているとも限らないのである。実際、「私はこの切断された頭から目が離せない」と告白する著者ジュリア・クリステヴァの眼差しが見つめ続けているのは、眼前にある表象された「斬首の光景」そのものであるよりは、むしろ、そうしたイメージ群に託されることで初めて意識されることになる彼女自身、そして我々自身の内面の風景に他ならないからである。

そもそも、本書の成立は、ルーヴル美術館が主催した「パルティ・プリ(Parti-pris)」というシリーズものの企画展に発している。それは、序文のレジス・ミシエルの言葉を借りれば、絵画をめぐるイデオロギーの固定化に対抗するために「美術館自体のなかに 制度(つまりシステムの中心部)のただなかに 批判的空間を作り出す」という野心的な意図を持った企画展であ



り、その基本方針として掲げられていたのは、独自の切り口を持った外部のゲストを招いて、展覧会の企画を依頼するという方法であった。本書は、こうしたルーヴル美術館の求めに応じて、クリステヴァが企画した「斬首の光景」という同名の展覧会のカタログであり、収録された図版とクリステヴァの文章との対話を通じて、「斬首の光景」に刻み込まれている欲望や恐怖、喪の悲しみの痕跡が丹念に読み解かれている。

それにしても、何故、斬首であり、人間の頭部への注視なのだろうか？

旧石器時代の頭蓋信仰、古代ギリシア神話のペルセウスによるメデューサ＝ゴルゴンの斬首、聖顔布（ウェロニカ、マンディリオン）に写し取られたキリストの聖なる顔、ヘロディアと娘サロメによる洗礼者ヨハネの斬首、巨人ゴリアデの首を刎ねる少年ダビデ、将軍ホロフェルネスの首を切断するユーディット…。西洋の文化的記憶の中からクリステヴァが掘り起こす「斬首の光景」の数々は決して残酷であることをやめることはない。しかしながら、こうして反復される斬首のモチーフが、彼女の幅広い学識と暗さの感じられるその内省とによって、一つに結びつけられて行くのを見る時、斬首をめぐる物語が、人類の、少なくとも、西洋世界における特権的な一つのモチーフ、しかも、反復的というよりは強迫的なモチーフとして現れるのを認めることができる。

何故、我々はこうした光景に取り憑かれているのか。クリステヴァの答えは簡単な要約を拒む性質のものであるが、そこに一貫して読み取ることができるのは、イメージへの信仰とも呼ぶべきものであり、表象による浄化への期待である。幼児が初めて喪失の体験をした時、不在の対象を言語やイメージによって代償するための力を獲得するまでの間、しばらく悲しみにふける期間があり、それをメラニー・クラインは抑鬱性態勢と呼んだが、クリステヴァはこうした心的機制を参照しつつ、苦痛の傷口を閉じ、抑鬱的な悲しみから脱するための手段として、死を再生へと反転させる表象行為こそが有効であると考えている。ただし、この表象行為とは、失われた対象を言葉やイメージといった人工物によって置き換えるという点において、幾ばくかの殺人行為であることを免れない。それは、本質的に、喪の悲しみとメランコリーに裏打ちされた行為なのである。

本書において「斬首の光景」が選ばれているのは、それが表象行為が伴う殺人的な性格を象徴的に示しているからであり、切断された頭部とは獲得されたイメージの隠喩である。しかしながら、忘れてならないのは、こうした象徴的な斬首が、表象空間という極めて人間的な世界の成立を可能にしているという点である。それは「喪、断念、去勢、死が表象となるような錬金術」であり、こうして獲得された言葉とイメージこそが、抑鬱状態からの解放だけでなく、人間相互の複雑なコミュニケーションを可能にし、現実が起こったかもしれない無数の殺戮をも回避させてきたのである。それでも現実に殺戮行為は続いているではないか。無論である。しかし、その連鎖を止めることができるのは、表象空間への移行という人間が獲得した最初にして最後の能力にかかっている。（みすず書房、2005年刊）

死生学研究会「現代日本の葬送儀礼のゆくえ」報告

島蘭 進(本 COE 拠点リーダー・宗教学)

お葬式やお墓は現代人の心を映し出す鏡のようなものだ。かつて葬送は死者を送る者の心情に即して形作られた。しかし、20世紀の末頃から日本では新たな葬送の形を求めて、さまざまな試みが行われるようになった。その中で目立つものの一つは、死に行く者が自らの葬送のあり方を定めようとする動きだ。「死の自己決定」を目指すこうした試みのもっとも早いものの一つが東京豊島区に「もやいの碑」をもつ「もやいの会」、またそのための諸手続を代行する「りすシステム」であり、1990年に発足している。

2005年7月14日(木)の午後、このもやいの会の中心人物である松島如戒氏を囲み、死を迎え死者を送る営みの変容について考える研究会を行った。COE「死生学の構築」では葬送や追悼の文化に関わる講演会、研究会をこれまでも行ってきたが、今回は新しい運動を行ってきた当事者を招き、現場の問題意識や経験に学びつつ、現代の死生の文化のあり方を問うという点で新しい試みであった。

まず、松島氏にもやいの会の発足の経緯、そのシステムの独自性、もやいの会員とその考え方の特徴等についてお話しいただき、次いで、元文学部長、西洋史学科教授であり、西洋の葬送文化に詳しい樺山紘一氏、青山学院大学元教授でキリスト教の立場から「よき死のあり方」について考察して来た小原信氏、死者の尊厳に強い関心をもつインド哲学仏教学専門課程教授の末木文美士氏にコメントをいただき、現代日本の葬送の文化の特徴ともやいの会の意義について理解を深めていった。

家中心の伝統的な葬送文化が危機を迎える一方、それにかわる葬送文化を持ちえないでいる日本の現状について、さまざまな観点から切り込みが行われた。とりわけ仏教寺院の死のプロセスとの関わりの形骸化が目立つ日本において、急速に変化が生じつつあるのではないかということ、またそれは地域によってどのような差があるのかについて議論が行われた。さらに、実際にどのような事情で新たな葬送様式が求められるのかという点につき、もやいの会のスタッフよりもやいの会で葬送を行った人々のいくつかの例が紹介され、孤独な死を迎える人々、また孤独な死者を送る人々の状況が如実に示された。

「死体の冷凍」といった話題ではひんやりとする場面もあったが、お互いの顔が見えるセミナー形式の討議で、参加者一同、余命を数えて励まし合うような気配も漂った。



Julian Savulescu 教授講演研究会報告

一ノ瀬 正樹(本研究科助教授・哲学)

去る 2005 年 6 月 30 日、東京大学医学部図書館 3 階 333 番教室において午後 5 時より、オックスフォード大学セント・クロス・コレッジのフェロウ、ジュリアン・サヴレスキュ教授の講演研究会が開催された。COE 主催のサヴレスキュ教授の講演研究会は 2003 年 6 月に続いて、二回目である。教授は、オックスフォード大学において上廣倫理財団が運営する実践倫理の研究所の Uehiro Chair でもあり、今回の来日も上廣倫理財団の活動の一環として実現した。サヴレスキュ教授は、出身地のオーストラリアにおいて学術賞を受賞されたばかりであり、もともと医学を専攻していたという知見や経験を生かしながら、応用倫理の分野でいま世界的な活躍を繰り広げている哲学者である。筆者はサヴレスキュ教授とは旧知の間であり、英国でお会いして以来の久しぶりの再会を得て、大いに旧交を温めることができた。

さて、今回の講演のテーマは、人間の能力の「増進」(Enhancement)についてであった。「増進」とは「治療」と対比される概念である。分かりやすくするため、あえて図式的に言えば、「治療」が病んだ状態をもとの健康な状態に復させる、マイナスをゼロに戻す、という医学的処置であるのに対して、「増進」は現在の健康な状態に介入して能力を高める、ゼロをプラスに高める、という処置である。身近な例としては、スポーツにおけるドラッグの使用、ニコチンやカフェインによる意図的覚醒、パイアグラによる性的増強、などがある。こうした「増進」は今日では遺伝子レベルでの操作としても実現可能になりつつある。すなわち、遺伝子の改良によって、知的能力、精神的能力、身体的能力を高めたり、あるいは自己管理能力、積極性、ユーモアのセンス、思いやり、非攻撃性といった利点や美德を多く備えさせたり、といった操作が技術的に可能になってきたのである。すると、果たしてそうした可能性を追求して、「増進」を実現していくべきなのかどうか、という倫理的問いが現れてくる。サヴレスキュ教授は、この問いかけに対して、積極的に「増進」を追求すべきだ、というかなり大胆な立場を明確に提示した。やみくもな「増進」の促進に対しては、神の領域を侵すとか、遺伝子的な差別をもたらすとかの反論がすぐに出てくるであろう。しかし教授は、道徳の目的は人間の幸福であるとする功利主義的観点に立ち、こうした反論への応答を試みる。たとえば、(1)外的環境を整えて人の能力を伸ばしてあげることが何の問題もないならば、それと構造上同じ操作である「増進」も認められてしかるべきである、(2)「増進」的介入をせずにレイプや犯罪が自然に生じるという状態を維持すべきだという人はいないはずだ、(3)差別の問題は「増進」に由来するのではなく社会的慣行の問題だ、といった論点を提出し、他者を害しないといった一定の合理的な制限をつけた上で、「増進」を促進すべきであると結論づけたのである。あまりに衝撃的な主張であり、多くの聴衆はその前衛性にとまどいさえ覚えたというのが正直なところだが、見かけの過激さではなく、議論内部の説得力が学問的には問われなければならないわけで、質疑の時間には、「増進」以外の他の方法で代替可能ではないか、生物学的決定論に与することにならないかなど、いくつかの当然の質問が出された。進行役を務めていた筆者自身も議論に加わり、「人間が幸福を求める」というのは事実としてそうだとしたことか、それとも「幸福を求めべき」という規範なのか、そしてもし規範ならば、親が子どもに生体臓器移植をするときのような自己犠牲的で利他的な行為や、名誉のために死を厭わない英雄やサムライなどの行為は非道徳であると見なすべきなのか、と伺ってみた。サヴレスキュ教授は、幸福の追求は規範であること、自己犠牲や英雄的自死行為はもっと詳細な分析が必要であることなど、丁寧に論点を挙げて答えてくれた。きわめて刺激的な講演会であり、この機会が COE「死生学の構築」の射程をさらに拡張し、一層の充実化を促していくことは間違いない。サヴレスキュ教授と上廣倫理財団に深く感謝するとともに、今後も「死生学の構築」とのさらなる研究協力を願う次第である。

ジョン・ノース教授 (UCL) 2005 年度 死生学連続講義 予告

市川 裕 (本研究科教授・宗教学)

総合テーマ：古代ローマ人の死生観とその変容

「共和政期の宗教伝統は、帝国成立に至る政争と対抗する新たな諸宗教運動の出現によって、いかに変容していったか」、これを全体テーマとして、古代ローマ人の死に対する考え方、祖先との関係、来世への憧憬という死生学の中心問題を探求する。5 回の講演内容は、それぞれ、古代ローマの政治体制と宗教制度との関係、代表的知識人の死に対する思想、国家祭儀を通じた祖先信仰のありかた、新興宗教にみる死後の生命に対する観念、そして最後に、総括的議論によって全体のまとめを行なう。最終回の講義は、特別講義として位置付けられ、コメンテーターを交えた討論を行なう予定である。

- - - - -

11月7日(月) 17:00~18:30

Priests and Law in Republican Rome 「共和政期ローマにおける祭司と法」

<ローマの宗教法は、共和政中期のローマ国制に対してどのように関わっていたか。また、祭司階層が政治生活に果たした役割とは何か。>

11月9日(水) 17:00~18:30

Cicero and Republican Divination 「キケローと共和政期の占い」

<『占いについて』にみられるキケローの主張とはどのようなものであるか。それは、当時の宗教生活に対するキケローの態度をいかに照らし出しているか。>

11月11日(金) 17:00~18:30

Caesar at the Lupercalia of 44 BCE 「前44年のルペルカーリア祭のカエサル」

<カエサルがルペルカーリア祭に与えた諸変化は祝祭全体の意味にどのように影響を与えたのであろうか。また、政界の重鎮にとって祭儀はどのような点で重要であったか。そして、当時を生きるローマ人の過去や先祖に対する態度を祭儀はどのように表現したか。>

11月15日(火) 17:00~18:30

The Underground Basilica at the Porta Maggiore 「ポルタ・マッジョーレの地下バシリカ」

<地下の集会場は、ある反体制的宗派が紀元後1世紀にも存在していたという事実を反映するものであろうか。また、この宗派の信徒たちが表現しようと試みた生と死の観念とは何か。>

11月17日(木)【特別講演(ワークショップ)】 16:00~18:00

Choice, Chance and Change in the History of Pagan Religions

「異教的諸宗教の歴史における選択・機会・変化」

司会：市川裕

コメンテーター：葛西康徳(新潟大学)、イスクラ・ゲンチエヴァ(ソフィア大学 Ph.D)

<帝政期におけるローマ宗教の全般的展開について述べる。死と救済に対する態度の変化を含めて、他の諸宗教運動との競合は、その展開にどのような衝撃を与えたのであろうか。>

国際シンポジウム

「死の向こう側 進んで死を迎えること、死者とともに生きること」 予告

多田 一臣（本研究科教授・国文学）

現代では「死」は徹底して隠蔽され、私たちも日頃は「死」を直接意識することなく生きている。人間にとって「死」が避けられないものである以上、死者は絶えず存在しているはずだが、そうした死者もいつのまにかこの世界からひそやかに姿を消してしまう。「いま、ここ」しか存在しないのが現代であり、前世も来世も意識されることはないから、それだけ「死」の実感は限りなく希薄化していくのだろう。

だが、それ以前の社会は、あきらかに「死」を、さらには死者たちの存在をより身近に感じるような精神性をもっていた。「死」はこの世の生の終わりではあっても、来世における新たな甦りを意味していた。死後の審判を畏れる感情はつよく存在したものの、来世の救済を確かなものと信ずることで、この世のさまざまな不条理やそこに生ずる不安を克服することができたのである。死者たちもまた、あの世から私たちの生活を見守り、加護を与えてくれるような存在として意識されていた。あの世もなく、「いま、ここ」しか存在しない現代とは、一人ひとりの個体が各自の責任において、そうした不条理や不安に立ち向かわなければならない、まことに厳しい時代であるといえる。

とはいえ、現代においても、「死」の向こう側を意識するような感覚がまったく喪われてしまったわけではない。私たちの精神の奥底では、そうした感覚がいまだに息づいているともいえる。

そこで、今回のシンポジウムでは、こうした「死」の向こう側を身近に感じる文化について、いろいろな角度から考えて行きたい。いまなお残る死者との濃密な交流の儀礼や、殉教の問題、個人の救済に思いをこらすキリスト教や仏教の思想の影響がどのように展開していったのかを考えることは、私たちの精神のありようを探る上でも大きな意味をもつに違いない。自爆テロや死刑や安楽死、日本の心中や自殺や靖国問題なども、このテーマと無縁ではない。

この問題にアプローチするには、さまざまなディシプリンを身につけた研究者の協力が必要となる。文化人類学や民俗学や歴史学、文学や思想史や宗教史の専門家に加わっていただくことで、死生学の観点から議論を深めていきたい。今回は、とくにフランス国立極東学院およびトゥルーズ人類学研究所の全面的な協力のもと、東アジアとヨーロッパに力点を置きながらも、世界各地の事例を考察することで、如上の問題を考えて行きたい。

本シンポジウムは、以下のように、公開講演と三つのワークショップから構成される。その詳細については、後日あらためてお知らせすることにしたい。

会期 2006年2月18日（土）～19日（日）

会場 東京大学文学部

2月18日（土）

9:30～12:15 ワークショップA 「進んで死を迎える」

14:00～17:30 公開講演

2月19日（日）

9:30～12:10 ワークショップB 「非業の死を受け止める」

13:30～16:10 ワークショップC 「死者とともに生きる」

16:30～18:30 総合討論

「次世代死生学研究会議～深化と展開～」 予告

仁平 典宏（本 COE 特任研究員・社会学）

21世紀COE全体がそうであるが、「死生学の構築」も主要な事業目的の一つに、若手の支援・育成を掲げている。次世代死生学研究会議は、その具体化のために、多様なディシプリンを背景とする若手研究者・院生が一堂に会し、死生学に関するテーマについて研究報告及び議論を行い、学問領域や大学を超えた長期的な交流の基盤を作ることを目的として計画された。

本会議は、11月3日～5日の2泊3日の日程で、和歌山県南部で開催され、8つの部会、全体会、そして熊野霊地見学が行われる。参加者は総勢45名に及び、本COEの特任研究員・RA・若手支援費研究員の他、かつて本COEに所属し現在大学や研究機関で活躍している若手研究者も参加する。また、京都大学大学院人間・環境学研究科のカール・ベッカー教授のゼミに参加している院生・若手研究員の7名も参加し、死生学における東京大学と京都大学との知的交流の促進が期待される。

初日には、「死生の文化／表象」「いのちを考える」「宗教とスピリチュアリティ」「いのち・関係性・ケア」の4つの部会が開催され、続く2日目の午前中には、残りの4部会「日本における生命観の諸相」「死生と教育」「記憶と死生」「哲学の視線をめぐって」が開催される。全参加者は各部会に分かれ、研究報告と議論を行う。

2日目の午後には、全体会が開催される。ここでは、まず京都大学のベッカー教授に、生命倫理・死生学に対して「日本の死生観」がもつ意義と日本の研究者・教育者の役割について講演して頂き、それを受ける形で本COEの前川健一氏が、「日本の死生観」の一つのケースとして「熊野における死生観の展開」を報告する。その上で、飯田篤司氏（鎌倉女子大学）と古澤有峰氏（本COE）が、それぞれの立場からコメントを行った上で、フロア全体も交えて学問領域を超えた議論が行われる予定である。そして、3日目には、「日本の死生観」に関わりが深い熊野新宮などの見学も計画されている。

本会議の成果は、『次世代死生学研究会議論文集（仮題）』の刊行、及び『死生学研究』への掲載という形で公表される。若手自身の企画によるこの会議は、死生学の将来の発展の方向性を示すものとなるかもしれない。さらに、本会議の目的である、学問分野を超えた討議を通じて培われる若手研究者の人的・知的ネットワークの構築は、今後の死生学の発展の上で大きな財産になることが期待される。2005年春から、若手のプロジェクトチームを中心に準備が進められてきており、また各参加者も報告に向けてそれぞれの研究を深めてきている。

事業推進担当者

(拠点リーダー)

島園 進 <宗教学>

竹内 整一 <倫理学・拠点リーダー代理>

(第一部会：死生学の実践哲学的再検討)

熊野 純彦 <倫理学・世話人>

一ノ瀬 正樹 <哲学・世話人>

松永 澄夫 <哲学>

関根 清三 <倫理学>

榊原 哲也 <哲学>

(第二部会：生と死の形象と死生観)

小佐野 重利 <美術史・世話人>

木下 直之 <文化資源学>

大貫 静夫 <考古学>

(第三部会：死生観をめぐる文明と価値観)

下田 正弘 <インド哲学仏教学・世話人>

多田 一臣 <国文学>

市川 裕 <宗教学>

池澤 優 <宗教学>

(第四部会：生命活動の発現としての人間観の検討)

武川 正吾 <社会学・世話人>

横澤 一彦 <心理学>

立花 政夫 <心理学>

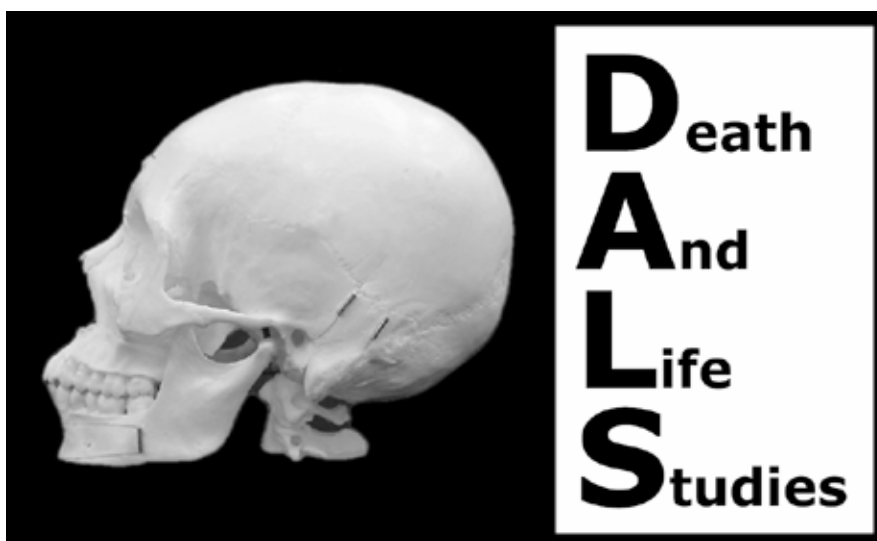
林 徹 <言語学>

赤林 朗 <医療倫理学>

甲斐 一郎 <健康科学>

西平 直 <教育学>

秋山 弘子 <社会心理学>



「DALIS ニューズレター」
第 11 号
平成 17 年 10 月 1 日発行
東京大学大学院人文社会系研究科
21 世紀 COE “生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築”
責任者 島 蘭 進
TEL & FAX 03-5841-3736